

# 建築人類学試論 —新しい知を生成する場の構築に向けて—

牧野冬生<sup>†</sup>

## An Essay on Architectural Anthropology —Possibilities as a Practical Methodology—

Fuyuki Makino

This Essay concerns architectural anthropology as a means of transcending the pre-existing framework of anthropology. Architectural anthropology attempts to realize the understanding of others through collaboration between the anthropologist and others in the architectural practices of reading, presenting, and making. Speaking of culture within the framework of anthropology means following Western intellectual frameworks. It is a matter of course that from here on, anthropology must look at the restraints and exclusionary mechanics affecting certain cultures, and that returning the results of its studies to others is one of the most important tasks it will face in the days to come. By socially presenting the understanding and results of two parties through architecture in the broad sense, architectural anthropology offers an image not of culture as a shared inheritance controlled by certain people, but as a sort of open commons where everyone can participate in the creation of a new culture. I believe that this process can lead us to a new anthropology that transcends the established framework of academism as well as allows us to create fresh cultural concepts in accompaniment with the understanding of others.

### はじめに

1960年代から1970年代にかけてポストコロニアリズムが新しいパラダイムを形成していく中で、人類学はパラダイムの消耗を経験していた。1980年代以降に人類学を学び始めた者は、従来の近代科学の旗手としての人類学の位置は消え去り、その代わりに「a crisis in anthropology」<sup>1</sup>や「a crisis in ethnographic writing」<sup>2</sup>といった記述に出会うことから始まった。人類学への批判を端的にまとめると、専門用語を用いた「他者」をめぐるパターン化された語り、民族誌で説明される仮説や理論が通文化的な比較研究によってなされていることであった。以後、人類学は、ある個別文化の内部構造を詳細に描き出そうとする民族誌研究へ傾倒し、観光、開発、女性、ナショナリズム、アイデンティティ、災害、難民、移民といった細分化されたテーマに取り組むようになった。その過程で経済学、政治学、哲学、言語学、社会学、カルチュラルスタディーズといった隣接分野との境界は急速に曖昧になり、人類学の内部からだけでなく、様々な学問領域から批判や影響を受けた。この状況の中で、欧米以外の地域を出身とする人類学者を巻き込んで人類学の危機を抜け出す様々な試みがなされてきた。現在の人

---

<sup>†</sup> 早稲田大学アジア太平洋研究センター助手

類学的フィールドワークは、中立的かつ客観的であるとした従来の概念ではない。人類学者は自分自身と対象社会の相互作用の問題を正面から取り上げ、対象社会と向き合うときの立場と意図を明らかにしている。人類学者の観照性は強く批判され、調査の対象地域社会という脈絡、対象地域と人類学者の帰属する社会との関係、人類学者の帰属する社会という脈絡の中で、異文化理解という営為がどのような政治性を抱えているのかという点にまで言及するようになった。また、昨今議論されてきたフィールドワーク成果の現地還元の必要性は、人類学という学問の政治性と倫理性に対する異議申し立てである。人類学的実践の再構築を求める姿勢は現在も続いている。

以上の状況を踏まえて、建築人類学においては異文化理解という営為を、人類学者と他者の協働による広義の建築に関する「読む・表現する・構築する」というプロセスの不断の実践の中に見出そうと試みるものである。具体的には、人類学者と他者との相互理解の枠組みとして「視覚化されたイメージ」という共有のフレームを提示すると共に、広義の建築を読み、表現し、構築することを通して、人類学的フィールドワークの成果を社会に還元する。建築人類学は、人類学という枠の中で新しい民族誌的实践を構築していくというよりも、人類学という枠組自体を新しくする試みである。本稿は3部からなる。まず、文化人類学をとりまく状況を概観し、現在の人類学が抱える問題点を整理する。次に、文化人類学において「建築」が歴史的にどのような研究対象として扱われてきたのか概観する。その上で、人類学的実践の新たな方途について、建築的实践をめぐる人類学者と他者の協働に焦点を置き、新たな異文化理解の枠組みを提案する。

## 1 現在の人類学をとりまく状況

### 1-1 自己批判とポストモダン人類学

人類学者は、フィールドワークという長期滞在に基づいた参与観察によって可視的及び不可視的な生活実態を詳細に記録し、どの文化にも優劣関係はなく独自の価値を認めるべきだという文化相対主義の理念を追求してきた。この意味では、人類学は近代科学の一員として進歩と解放の一翼を担ってきた。しかし、1980年代以降人類学は様々な角度から見直しを迫られた。人類学という学問の核心であったフィールドワークの客観主義と実証主義に異議申し立てが行われ、民族誌言説への批判を契機として様々な批判や意見が寄せられた<sup>3</sup>。

こうした人類学者の自己意識に関する批判は、クリフォード・ギアツ (Clifford Geertz: 1926–2006)、ヴィクター・W・ターナー (Victor Witter Turner: 1920–1983)、エドワード・W・サイード (Edward Wadie Said: 1935–2003)、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu: 1930–2002) などにより、以前から指摘されていた。しかし、現在の人類学批判の潮流を形作った直接の契機となったのは、1986年にジェイムズ・クリフォード (James Clifford) とジョージ・マーカス (George E. Marcus) によってまとめられた『Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography』である。この中で、それまで客観的事実の報告として見なされてきた民族誌が、詩学と政治学の産物であることが指摘された。また、同年に出版されたレナート・ロサルド (Renato Rosaldo) の『Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis』も同様に、フィールドワークと民族誌の中に潜む政治性とイデオロギー作用に焦点を

あてた論考である。ロサルドはこの論考で、収集したデータをテキスト化するという民族誌を作成する作業において「古典的規範 (classic norms)」がいまなお強い影響を持っていることを指摘し、その古典的規範を見直すという作業を著書のテキスト内で実践している。ロサルドは、民族誌に関する古典的規範のすべてを捨象するのではなく、それが多くの社会記述の一形態に過ぎないことを指摘し、より幅広いレトリックの形式を使うことで多元的な現代社会を記述する新たな試みを検討している。人類学は人類学分野内外からの厳しい批判を受ける中で、異文化を理解するための新しいアプローチを模索するようになった。

## 1-2 非中立性・非客観性の表明

人類学者は、人類学者自身と対象社会の相互作用の問題を正面から受け止め、対象社会へアプローチするときの立場と意図を明らかにすることが必要となった。社会に積極的に関与することを厭わない新しい人類学の方角性が提起されたのである。このことは、フィールドワークが中立的かつ客観的であるとする概念を学問的な基礎としてきた旧来の人類学（近代人類学）とは大きく異なる考え方である。こうした 1980 年代後半以降の新しい人類学（ポストモダン人類学）は、民族誌の古い権威的な形式や民族誌的現在を用いた自己完結的社会の記述を強く批判していたため、人類学的実践の領域を拡大しようとしている人々には共感を持って受け入れられたが、一方で近代科学としての人類学を信奉する人類学者からは多くの批判が寄せられた。代表的な批判の内容は、主に次の 4 点である<sup>4</sup>。

- (1) ポストモダン人類学があまりにもテキスト主義的で、文化人類学の問題を民族誌におけるレトリックと記述の問題に還元しすぎている点。
- (2) 対象社会の社会実践をファンタジー化し、人類学者の自己的・内面的な記述に陥ってしまう点。
- (3) 調査地域の人々の能動性と創造性を過度に強調した文化相対主義が、社会変革の可能性まで否定してしまう点。
- (4) 人類学者が抱える歴史観を元に作り上げる従来の民族誌記述を否定した結果、現実社会への政治的・倫理的関与をなくしてしまう点。

実は、この批判の内容こそが近代人類学が民族誌記述を重要視していた表れである。ポストモダン人類学の方角性は、上記 4 点のような民族誌テキストの再構築に焦点があった訳ではなく、民族誌の記述が抱える政治性へ接近するものであり、現代社会への関与をなくしているものはない。むしろ、民族誌の記述がどのような権力体系と絡み合い、民族誌は誰によって誰のために書かれ、文化を書くという権利はどんな権力体系によって保障されているのかに疑問を抱き、民族誌を書くという営為の政治的位置付け、人類学者やフィールドの空間的な位置付けについて再考する点にあったといえる。また、民族誌と旅行記や詩といった文学との境界領域、写真や映像における新しい人類学的実践という領域横断性は、人類学の内部では度々議論を巻き起こした。こうした人類学的実践の領域を拡大していこうとする試みは、今までの人類学の科学性や客観性をすべて否定しようとしているものではない。むしろ、問われているのは、人類学的実践とはどのような形であるべきか、対象社会で集めたフィールド経験をどういった形で考察するのか、またその人類学的実践を保障する科学性や客観性はどのように構築されてきたのかという文化人類学の省察を軸にした多元的社会分析の可能性である。

### 1-3 協働による異文化理解

協働作業に基づいて生成される人類学的実践の必要性は、ロサルドの論考の中に見ることができる。彼は、社会分析する主体も、分析の対象である客体と同じく位置付けられた主体であり、時間の中で絶え間なく位置付け直される存在であるとして、分析される客体も分析者との関わりの中では分析する主体となり得ることを指摘した<sup>5</sup>。彼は、対話や相互批判的な解釈の交換によってこそ相対的な知が得られると述べている。また、協働作業による文化理解の可能性について、博物館の展示に関するクリフォードの論考がある<sup>6</sup>。この論考では、カナダの北西沿岸に位置するバンクーバーにある4つのミュージアム（ブリティッシュ・コロンビア大学人類学ミュージアム、クワギウルス・ミュージアム文化センター、ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア・ミュージアム、ウミルタ文化センター）を例に挙げて、ネイティブ集団がミュージアムという支配的な「芸術－文化システム」をどのように受容してきたかが論じられている。クリフォードは、国民文化という支配的なもの語りと部族文化との関係に焦点をおき、ミュージアムという施設が西洋的な意味でのミュージアムという言葉で表現できるものではなく、ネイティブ集団の語り、収集、展示という先住民伝統から連続した場であることを主張した。部族の作品は、消え去った過去から救い上げた宝物ではなく、現在進行中のダイナミックな生活形態の一部である。これらの多くの展示はネイティブアメリカンのアーティストと部族の協働で企画され、過去の展覧会も先住民のキュレーターとの協働作業で行われた。この4つのミュージアムは、芸術や文化、政治や歴史の言説を独自の方法で混ぜ合わせている。変化する歴史と不平等な文化的・経済的パワーバランスに応じて、この4つのミュージアムは競い合うと同時に補い合っている。このような協働作業に伴って創出される文化理解の可能性は、ひとつの回答があるわけではない。人類学という領域を横断し分野を超えて実践していくことによって、新たな可能性が開けていく。

## 2 人類学における建築

### 2-1 構造化された空間

次に、文化人類学において建築がどのような研究対象として扱われてきたのか概観する<sup>7</sup>。人類学ではその初期から、人々の生活舞台である住居やその配置に関して大きな関心を持ってきた。1935年に発表されたヤン・ペトルス・ベンヤミン・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング (Jan Petrus Benjamin De Josselin de Jong; 1886-1964) の『民族学的研究領域としてのマライ諸島』<sup>8</sup>はその初期の文献である。デ＝ヨセリン＝デ＝ヨングはインドネシアの社会構造を説明するためのモデルとして、現地の住居とその配置における空間分類を利用した<sup>9</sup>。この視点は、伝統に基づいた自立した社会というものが調査の前提として存在し、その社会構造が空間上の構築物に反映されている、又は反映されるべきであるという思考を包摂している。その後、人類学の中で住居研究という独自の領域を形成したクラーク・カニンガム (Clark E. Cunningham) の『Order in the Atoni House, Right and Left』<sup>10</sup>は、住居空間から住民の世界観を読み取ろうとしている。以後、人類学における住居空間の構造分析は、社会構造と結び付けた初期の形から住民の信仰やコスモロジーにまで拡大し、どの分類をどのように選択するかは一層多様で恣意的になった。特に双分観は、考え方によってはどこの地域社会でも見られる現象であるため、構造主義を

装った民族誌が大量に作成され、同時にステレオタイプな住居象徴論に対する懐疑も提起された<sup>11</sup>。筆者は、住居の象徴性は未だ重要なテーマであると考え、佐藤のように安易に社会構造や世界観と結び付ける従来の記述は成立し得ない<sup>12</sup>との意見もある。今後の住居の象徴性は、外部者として住居を捉えるだけでなく、住民との協働関係を基礎としてどのような形で内部者の視点を取り入れることが可能なのか考えていく必要がある。

住居の象徴分析における人類学者の非中立性・非客観性については、ロイ・エレン (Roy Ellen) の指摘がある。エレンは、対象文化の象徴体系は観察者の目を通してしか明らかにできないと指摘している。エレンは、ヌアウル族の家屋に関する論考『Microcosm, Macrocosm and the Nuauulu House』の中で、「住居象徴論は、ある断片を正しいパターンにあてはめて、唯一の解答を発見することを必要とする一種のパズル」であると述べ、「住居の最も興味深い点は、住居がひとつの秩序を表しているだけでなく、複数の秩序が異なる状況下で、異なる人々に、異なる仕方理解されていることである」<sup>13</sup>と、社会内部には複数の異なるレベルの象徴体系が存在すること示唆した。また、住居を住民の小宇宙であると捉えることに同意を示す一方で、住居研究の解釈指標は分析者が便宜的に持ち込むものに過ぎないとして、住居の象徴論の抱える根源的な問題を指摘している。

## 2-2 象徴分析の限界

住居と人間の関係分析は、多様性を帯びている。住居象徴論では、住居の空間構造は見えない意味に支配されており、その論理は文化の他の局面にも働いていると考える。この方向性は、住居を通して文化の全体像を把握していくことが可能であると考え、ことに繋がる。そして、住居を通して文化全体を論じることは、住居の背後に変化のない固定した社会を想定することに帰着する。この方法では住民が抱える家族の構造、都市認識の変容、住み手の多様で複雑な日常生活や居住形態を分析することはできない。今後の人類学において住居研究は、住民はどのようにコミュニティの一員となるのか、住民間の関係が住居の形式にどのような影響を与えるのか、住居やコミュニティ空間が喚起する住民の関係性はあるのかなどの住居と住まい手の複合的で相互的な関係と共に、住民の都市観や住居観という居住に関連するイメージがどのような住居政策や都市計画のもとに形成されてきたのかなどの政治性を捉えていくことも重要である。行政の都市計画や街づくりに伴って喧伝される新しい居住概念や居住観は、必ずその時代の政治的な背景を抱えている。しかし、この方法においても建築や住居を観察者（人類学者）のフィルターを通して読み解くという基本姿勢は変わらず、住居象徴論が根源的に抱える問題は解決されない。

## 3 建築人類学

### 3-1 人類学という枠組みの再構築

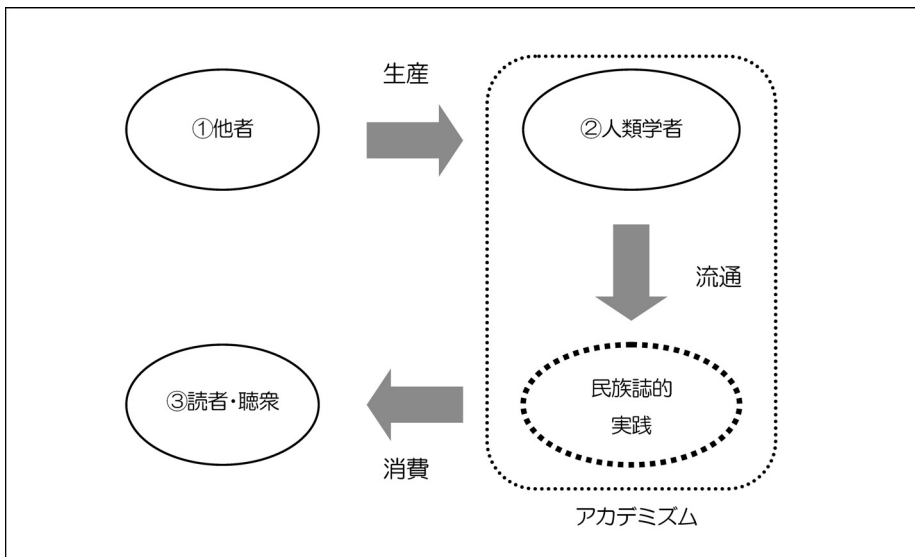
建築人類学の方向性は、人類学という既存の枠組の中で新しい実践方法を模索するのではなく、その枠組自体を再構築する試みである。まず、建築人類学における「建築」を定義する必要がある。日本においては、明治以降に近代化を進める上で“architecture”という概念が輸入され、この概念の訳語として「造家」と「建築」という二つの造語があてられた。現在は、「造家」は文字通り技術的側面を表した



ものであり「建築」は思想的なものを含むものと理解できるが、当時は「造家」は創造的な意味を表し、「建築」は逆に構築一般に関わる用語であったという指摘もある<sup>14</sup>。いずれにせよ、日本では建築学科が工学部に属することでも分かるように、“architecture”の技術的側面に注意が向けられ本来の意味で正確に使われてきたとはいえない。“architecture”は複数形のない抽象概念であり、具体物である“building”とは明確に区別される。抽象概念としての“architecture”は、壁や床や屋根といったハードウェアとしての建物と、それによって形成される空間を意味し、同時に「物事を作り上げる意志と構成」といったニュアンスを含む上位概念として捉えるべきである。本稿の建築人類学における「建築」とは、可視的な物質としての建物、それらの内部又は間にできる空間、人々が集まる場や境界など顔を合わせることによって成立する場所性、さらに頭の中に描かれるイメージとしての建築や空間まで含む、より大きな概念「広義の建築」とする。

次に、旧来の文化人類学に関わる当事者の関係性について概観した後、建築人類学における当事者について詳述する。まず、旧来の文化人類学においては三当事者、①他者 (others)、媒介者としての②人類学者 (anthropologist)、そして文化人類学者の報告を受容する③読者 (readers) と聴衆 (audience) が存在する。この三者の関係を整理すると (図表 1)、まず人類学者がある学問的仮定や課題を設定して他者が属する社会でフィールドワークを実施し、その結果を軸に新たな議論を組み立て、事象を整理し、人類学者自身が抱える文化的枠組みによって分析するという活動がある。他者を対象として新たな知の枠組みを生成するということから、この活動を「生産」と呼ぶこととする。このとき、人類学者は自分自身の属している組織や立場、人類学者が他者を分析する枠組みがどのような権力体制の中で構築されているのかについても認識していなければならない。次に、人類学者から読者や聴衆へ伝達する行為が発

図表 1 文化人類学の枠組



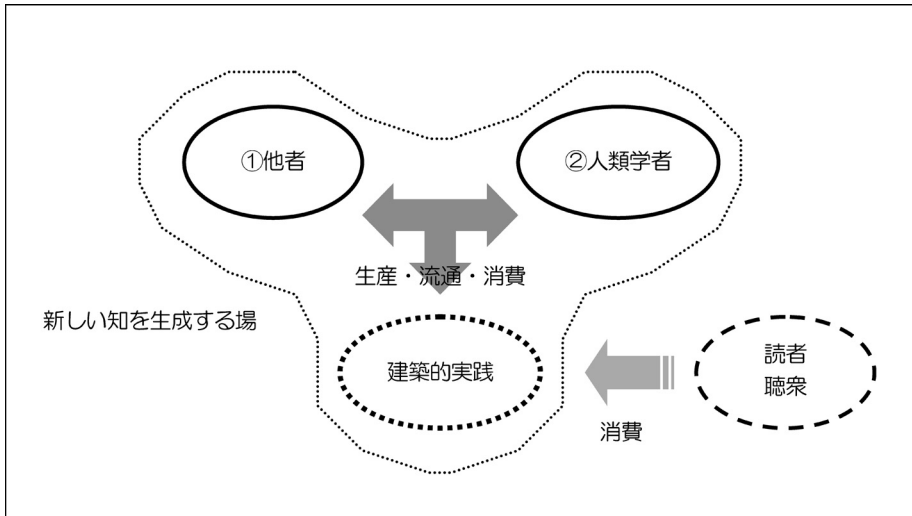
出所：筆者作成

生ずる。伝達手段としては、フィールドワークの成果を母語に翻訳し、民族誌に記述し発表することである。このときも、その翻訳行為がいったい誰のためになされるのか、分析の主体と客体は誰なのか、言語への翻訳時に発生する様々な理論的問題に配慮しなければならない。言語への翻訳により、フィールドワークの成果は社会一般に「流通」する。一方で、この成果はフィールドワークの客体である他者に還元されることは少なかった。近年議論されているように、フィールドワーク成果を現地に還元する場合は現地語での公表が必要であるし、より多くの読者を求めるのであれば英語、スペイン語やフランス語による記述が必要となるだろう。その後、アカデミズムに属する人々や人類学者が属する社会の人々によって、民族誌や発表内容が他者を理解し説明するために再利用されることにより、文化人類学的実践が「消費」される。

この民族誌に代表される人類学的実践を保障する制度は、人類学者がアカデミズムに属する学者や研究者であり、読者と聴衆は人類学者が暮らす文化に属する人々（少なくとも人類学者が属する文化を理解する人々）であるという構図によって成立してきた。人類学者は民族誌というフィールドワーク成果がアカデミズムの中で認められると、その功績によって学者として認知され、今度はこの制度の再生産に参画するアカデミズムの一員となる。人類学における民族誌などの人類学的実践は、異文化理解という目的をアカデミズムという制度の中で、西欧近代において発展した知の枠組みをフィルターとして分析し実践する手段であった。一方、人類学者としてアカデミズムの世界に参画することに疑問を抱き、開発問題や環境問題との関連の中でより実践的な場所で活動することを選択することもあり得る。しかし、アカデミズム以外の世界においても広い意味での人類学者として生きていくなれば、伝達対象がより広範囲になったとしても読者や聴衆にあたる人々に対してフィールドワークの成果を伝えるという構図は変化しない。

次に、建築人類学という枠組みに関わる当事者について整理する（図表2）。建築人類学においては、基本的に2当事者、①他者と②人類学者が存在する。かつて人類学者のフィールドワーク結果の報告と発表の対象であった読者と聴衆は、基本的にこの枠組みの外にいる。人類学者はまず他者が属する社会において「広義の建築」に関するフィールドワークを実施し、その結果を軸に新たな議論を組み立てる。同時に、他者も自らを主体として彼ら自身の文脈に沿って「広義の建築」を解釈する。その後、他者と人類学者との間で行われる作業は、人類学者と他者の間の理解を目指した相互批判的解釈であるが、このとき両者を媒介するのが後述する「視覚化されたイメージ」という共有の枠組みである。その後、両者による建築的实践によって、他者の生活の場に建築を「流通」させる。建築は、社会の中である一定の期間にわたって存在することで社会的影響を及ぼす。他者と人類学者は、建築の原案、計画、構築プロセスにおける協働を通じて社会活動に参画する。かつて読者や聴衆であった者は、足を運んで実際に建築空間を観照する行為によって建築的实践を消費するに留まる。このように考えると、建築人類学に関わる者は、もはやアカデミズムという制度の中のみには留まることはありえない。「広義の建築」を他者と共に生産、流通、消費するためには、他者の生活やコミュニティ形成にも積極的に関わることになる。つまり、異文化理解を目的するという意味では人類学者でありながら、建築家、都市計画家や社会活動家であり、インサイダーになることができないことを了解した上で、少なくとも他者にとって長期の伴

図表 2 建築人類学の枠組



出所：筆者作成

注：本枠組みは、建築設計でいえば、①他者が施主にあたり、②人類学者が建築家、建築的实践は建築物にあたる考えるとわかりやすい。建築設計では、建築家と施主の強い連携が必要であるように、建築人類学では、他者と人類学者の協働が必須となる。協働の手法については、3-3を参照。

走者となることが必要とされる。

### 3-2 建築人類学の方法

建築人類学は、旧来の人類学が抱えていた三者間の枠組みを組み替えることで、アカデミズムという制度内の知とその制度外の知を協働させ、アカデミズムという制度に替わる新しい知を生成する場の提案であり、その新たな枠組みの中で異文化理解のあり方を模索する。前述したように、生産、流通、消費の主体と客体が時間の推移の中で新しく位置付け直されることを容認し、他者と人類学者という二者間に新たな共有の枠組み「視覚化されたイメージ」を提示する。この枠組みの実効性と有効性についてはより理論的な詳説が必要とされることを認識した上で、後述するように実務レベルでは視覚的表現が同じ目線での議論を可能とし、共有可能なコミュニケーションツールとして有効な伝達効果を持っているという点を本稿では詳述するに留まる。

建築人類学における人類学者と他者の協働の方法は3フェーズから成り立つ。第1フェーズは、フィールドワークを通じて「広義の建築」を読む作業である。人類学者は、住民の家族構造、都市認識の変容、日常生活、多様な居住形態をグローバルな社会現象の脈絡で捉えるために、物質としての建築のみに焦点を当てるのではなく、「広義の建築」に関して長期の参与観察を実施することで様々な住民の動態的側面を把握する。それは、既存住居に内包されたコンテクストを読み解くということに留まらず、住居自体やコミュニティにおける住民共有の場所性が新しい人間関係を喚起するというダイナミックな動きを捉えることが必要である。第2フェーズは、「広義の建築」に関する解釈の共有である。第1フェーズにおいて実施したフィールドワークの成果を他者と共有し、相互批判的な解釈を可能とするた



めに、「視覚化されたイメージ」という共有の枠組みを利用する。第3フェーズは、建築（物質としての建築）の構築である。第2フェーズにおける批判的解釈の共有を基底として、具体物としての建築を構築する過程である。人類学者は、地域社会に積極的に関与し他者と協働して建築実践（建築案・設計・施工プロセス・監理・財務など）に関わる。協働で建築を創造するという実践的過程を通して、他者の社会に新たな解釈を生み出す具体的な建築物を創造する。この第3フェーズにおいて構築された建築は住民生活を支える基礎となり、「広義の建築」を読むときの新たな対象として第1フェーズに再帰する。建築人類学の方法は、フェーズ1からフェーズ3の再帰的过程を基本とする。

### 3-3 視覚化されたイメージ

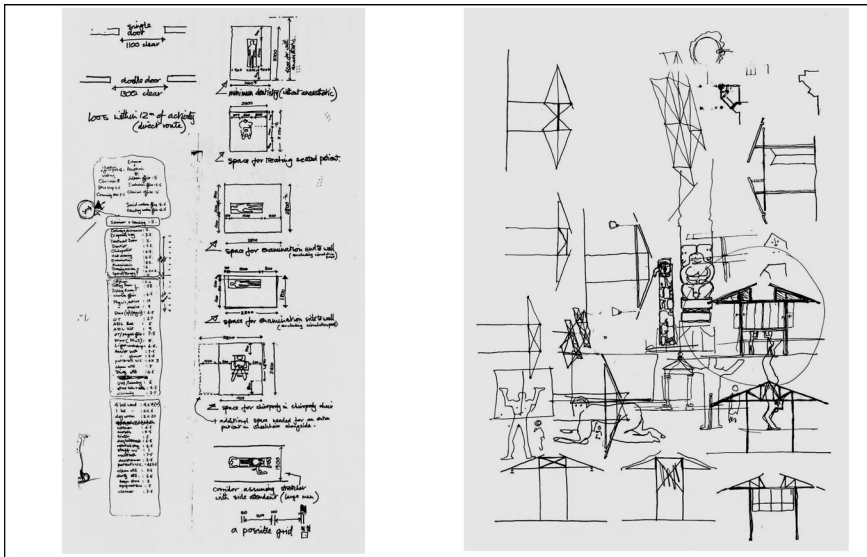
第2フェーズにおいて他者と人類学者が解釈を共有するための重要な要素である「視覚化されたイメージ」という枠組みについて詳述する。この「視覚化されたイメージ」は、貧困地域改善事業の住民参加型ワークショップから想起された。フィールドワークによる人類学的成果と住民自身の解釈を、「視覚化されたイメージ」を通して共有することにより、第3フェーズへ連続させる建築的实践への足掛かりとなる。「視覚化されたイメージ」は、「広義の建築」における「人々が集まる場や境界」「住民の居住観や都市認識」「頭の中に描かれる建築や空間」を具体的な視覚的表現としたものである。具体的には、平面的表現（ドローイング、スケッチ、平面グラフィック）、立体的表現（模型、建築）、映像的表現（連続したシーケンス）、専門的表現（地図的表現・図面表現）である。専門的な表現は、前述の3つの視覚表現のすべてに関係する。図面は実際に体験する空間とは別のものであり、実体の空間と比べると欠落する情報が多い。この情報の伝達の不完全さは、共有された手続きによって読み解くことで初めて、情報の埋め合わせを行うことが可能になる。本稿では、これら視覚的表現が実務上有効な伝達手段であるという点に着目して、イメージ共有の可能性と問題点について検討する。

コミュニケーションと視覚的イメージの関係についての理論的論考には、協働、住民参加、コミュニケーション行為などをキーワードとして、ユルゲン・ハバーマス<sup>15</sup> (Jürgen Habermas)、ジョン・フォレスター<sup>16</sup> (John Forester)、パツィー・ヒーリー<sup>17</sup> (Patsy Healey)、ジュディス・イネス<sup>18</sup> (E. Judith Innes) などの先行研究がある。ミハイル・バフチン (Mikhail M. Bakhtin: 1895-1975) は、ドローイングは真に対話的言説の基礎を提供するとし、建築に関わる様々な関係者が持つ異質な要素が混淆した言語はある瞬間から統一され、大きなコミュニケーション的・文化的なまとまりとなる<sup>19</sup>と論じ、ドローイングの言語的な性質と、その共有の可能性について指摘した。また、人類学者のエドワード・ロビンズ (Edward Robbins) は、「ドローイングは、クライアントと建築家、エンジニアと建築家、コンストラクターと建築家のそれぞれの間に交わされた建築的会話の記憶である。ドローイングは、建物を作る過程における様々な側面で関わる人々の合意を促し、その合意の記憶としての役割を果たす。』<sup>20</sup>とし、ドローイングの社会的機能について言及した。ここでは、視覚的イメージが解釈共有の上でどのように利用されてきたのかを、都市計画と建築の領域における事例を見てみたい。ステファニー・デューア (Stefanie Dühr) は、広域スケールの空間計画において地図的な視覚表現（図表3）が、都市計画の主要なメッセージを伝えるツールとして有効に働くことを指摘している。デューアは、視覚的表現によって、住民同士や住民と行政の意見の相違が明らかになり、結果として両者を合意形成へ導くことになったと



一方でロビンスは、ドローイングの矛盾する役割にも言及している。ロビンスは、「建設過程に関わる多様な関係者が建築プロジェクトにおいて雑多で複雑な側面に対処するために、ドローイングは共通の言語を提供する」としながらも、一方で「多くの関係者の社会的対話と社会的関係を秩序立てし、社会的ヒエラルキーを与え、建築の社会的産物が秩序立てられるための重要な手段を提供する」<sup>27</sup> として、ドローイングが必ずしも平等な社会的対話を促すのではなく、ある権力関係を背景にして利用される可

図表4 ドローイング



出所: Robbins (1994)

注: コミュニティホスピタルを利用する人々の利用形態や動作範囲 (左), ホスピタルの建築構造や採光 (右) に関する初期ドローイングである。このドローイングは、カリナン事務所とクライアントの間において利用されただけでなく、クライアント間の議論においても利用されていた点が重要といえる。

能性を指摘した。

言説を共有しない者の間では、ドローイングによってその構想や思考方法などを明確にすることができる。この意味においては、ドローイングを言語として捉えられる。この言語的側面については多くの指摘があるが、中核的な問題はドローイングの多義性である。デューアによると、ドローイングを見た人々の頭の中には多くの異なるイメージが同時に存在すると指摘し、イメージが個人や組織によって異なる解釈で認識される問題について指摘した。また、視覚的表現の限界について、表現にすべての事象を盛り込むことは不可能であり、表現する際に恣意的な選択が働く点、解釈する側の職能・経験・環境に依存する度合いが高いとの指摘がある。

以上のように、「視覚化されたイメージ」という枠組みを批判的解釈の基盤として利用する可能性について、建築と都市計画から事例研究を示した。この枠組みは建築人類学において「他者と人類学者が解釈を共有する」ために最も重要な要素である。指摘されている問題点について、より多くの事例研究を基に理論と実務の両方の視点から検討しなければならない。

### 3-3 ケーススタディ

#### 3-3-1 フェーズ1

筆者が調査したフィリピンのメトロマニラ都市貧困地域においては、カトリックへの信仰が厚く、住居内でも幼いイエス像 (St. Niño) や、マリア像が配置されている家が多い。住居象徴論では、住民の宗教的世界観と空間構成の関連を指摘するだろう。しかし、不法占拠地域という極度に困窮した状態の中

で、いわゆるブリコラージュ的に構築されているシュルターとその社会構造に相関関係を求めるのは性急である。住居は更新が前提であり、バラックからコンクリートブロックへ向かうダイナミックな過程を静的に捉える手法はここではふさわしくない。そこで、広義の建築として家族や住民同士の顔を合わせる場に着目して調査してみると、狭小住居と隣接性を伴う場所における生活実態の中に、儀礼親族関係 (Compadrazgo System)<sup>28</sup>、Bata 関係、フィリピン的価値観など伝統的因習を抱えつつ新しいダイナミックな人間関係を引き出すことが可能であった。それは農村や出身地から引き継いできた伝統やノスタルジアに引き込もった古い関係性ではなく、今を生き抜くための手段として伝統的関係性を現代的に作り変えるという新しい方法である。

ここでは貧困地域における儀礼親族関係について調査した結果について概観したい。まず、現在のフィリピンにおける儀礼親族関係においては、本来の宗教的機能はほぼ消えている。現在の儀礼親族関係の中核要素は、儀礼オヤと儀礼上の子供達の実の両親との関係である。親族関係を重要視するフィリピンの伝統的社会は、他人との関係をどのように構築するのかということが非常に重要な問題であり、この儀礼親族関係は他人を親族関係に含めるために重要な社会的儀礼である。儀礼オヤと実の親の間では、お互いをパレ (pare) やマレ (mare) と呼び合い、さらにその霊的關係は両方の親族へ拡大していくことになる。この関係は、儀礼オヤと儀礼上の子供達よりも、儀礼オヤと実の親同士の社会的かつ経済的な相互扶助関係を成立させる。都市貧困地域においては、この儀礼親族関係を結ぶ対象は、同じ地域に居住する住民同士か、出身地を同じくする同郷の仲間が多い。お互いに子供がいる場合は、相互に儀礼親族関係を結んでいた。また、フィリピンにおける儀礼親族関係の中核要素である社会的かつ経済的な相互扶助に関しては、お互いが経済的にも精神的にも極めて厳しい生活をしているという事情もあり、本来の相互扶助関係を維持できていない面もある。

また、本来の儀礼親族関係は、一生涯顔を合わせるような関係性の中で構築され維持されてきたのがあるが、都市貧困地域の住民には、その意識において大きな変化が生まれている。都市貧困地域の住民達は、フィリピン政府やメトロマニラ自治体からの幾度にもわたる強制退去や移住政策により、それまで都市の中で維持してきた関係性をその度に断絶せざるを得なかった。その経験から、新たな居住地において結んだ儀礼親族関係は、必ずしも長く維持できるものではないことを認識している。それに関わらず、新たに儀礼親族関係を結ぶ点には、まず自己の世代を可能な限り拡大することで平等な相互扶助関係を維持することが、都市貧困地域において生きていく上で必須の条件であるという現実的な生活に関わる問題がある。一方、儀礼親族関係を結ぶことによる自己関係性の拡大は、自己確認を促しアイデンティティの維持に繋がっている。このように、都市貧困地域における儀礼親族関係は、都市に生きるために必要な経済的側面と、自己関係性の拡大による自己確認という伝統的側面の両面を内包する。

具体的な例を Homeowners Association (HOA) という不法占拠者のコミュニティについて見ていきたい。都市における不法占拠者は、道路拡張や商業地開発<sup>29</sup>のような公的・経済的事業が実施される際に立ち退きの対象となりやすい。メトロマニラ行政は、増加する不法占拠地域の問題に対して様々な対策を行ってきた<sup>30</sup>が、国家住宅庁 (NHA) によると、1982 年から約 20 年間で 7 万 6000 世帯が移住を余儀なくされた<sup>31</sup>。立ち退きの対象となった人々に対しては再定住地が用意される場合もあるが、多く

の場合、住民はメトロマニラの新たな土地で再度不法占拠を行うことになり、行政の強制移住政策と住民の不法占拠が何度も繰り返されてきた。

この不法占拠地域の問題に対する有力な改善手法のひとつが、CMP 事業（コミュニティ抵当事業）である。この手法によると、不法占拠者は当該地域の土地所有者と土地譲渡契約が成立することを条件として、その土地を担保に公的機関から長期低金利の融資を受け、土地所有権を獲得することができる。この土地所有権取得という具体的な目的が、住民の生活改善への意識を高め、自助努力を引き出す大きな要素となるのではないかと期待されていた。CMP 事業の特徴のひとつに、Homeowners Association (HOA) という法人組織がある。住民は CMP 事業の実施のために、HOA という法人組織を結成しなくてはならない。HOA は、土地所有者と土地譲渡契約を結び、かつ長期低金利融資を受ける主体となる法人組織であり、上記契約は不法占拠住民が個別に行うことはできない。HOA は、土地取得後も住民から毎月定額のローン支払いの管理や滞納者に対する対応などを行うため、ひとつのコミュニティとして存続することになる。

CMP 事業は土地契約に関する極めて煩雑な手続きが必要であり、事業開始から完了まで早くても数年の時間<sup>32</sup>が必要となる。その理由のひとつには、土地所有権が複層しているメトロマニラ独自の事情がある。フィリピンでは長い植民地支配と戦争、政治体制や土地政策の変化などによって、複数の土地所有者が存在する場合があります、データベースの未整備による確認作業の遅延が多い。また、HOA と土地所有者の間で土地譲渡の契約が結ばれたとしても、政府からの融資を受けてから土地所有者へ支払うまでには、かなりの時間を要するため、土地所有者が第三者に転売する場合がある。その他にも、土地所有者を装って HOA と接触してくる不法開発業者（シンジケート）の存在が挙げられるなど、CMP 事業の完了までは考慮しなければいけない問題が山積している。CMP 事業における貸付は統合住宅融資制度 (HULP) と呼ばれ、貸付の返済期限は最長で 25 年である。この長期返済を継続的に進めていくためには、HOA の果たす役割は大きい。何か問題が発生した場合、HOA は適切な解決策を推進することが要求されている。HOA に属する住民は、CMP 事業における複雑で長期間に及ぶ手続きを、お互いの協力の基に行っていくことになる。そのため、HOA の経験を共有し土地所有権を獲得することができた住民達は、HOA に対して強い帰属意識を保有することになる。

CMP 事業への参加単位は、世帯 (family) 単位であるため、CMP 事業によって血縁関係者同士が離散してしまうことがある。また、自治体の政策による強制退去に伴って、都市において保持してきた人間関係が崩壊してしまうことは、都市貧困地域においてよく見られることである。CMP 事業における HOA は、伝統的な形成過程を経て構築された人間関係ではない。CMP 事業に参加した住民達は、伝統的な親族関係に頼っていたのでは得ることのできない土地所有権の取得と、それに伴う貧困からの脱出という便益を、HOA という集団（コミュニティ）に求めたのである。よって、HOA という集団の成立要素には、基本的に親族を基本とした伝統的人間関係は存在せず、むしろコミュニティの経済的な利益が基本にある。この HOA というコミュニティが持つ共同性と経済性にとっては、伝統的人間関係は相容れないものといえる。しかし、HOA の中でも、住民同士が儀礼親族関係を結ぶことによって近隣関係の強化を図っている事例がある。この事例は、土地所有権を取得し定住する権利を得た住民が、伝統的



な人間関係へ回帰していくと捉えることもできる。住民は調査地域において、直接的かつ間接的にコミュニティリーダーや近隣者と儀礼親族関係を結んでいた。CMP 開始段階では、土地所有という共通目的によって血縁関係を越えて結成された HOA は、徐々に儀礼親族関係という伝統的な関係性を包含することになった。

都市貧困地域における儀礼親族関係は、本来の関係性よりも緩やかで曖昧なネットワークである。ここでの儀礼親族関係とは、伝統への回帰ではなく、経済的組織 (HOA) と伝統的組織の両方の世界に足を踏み入れた、戦略的な生活実践と考える。土地取得という目的を達成するためには、近代的なシステム (契約・交渉・融資・借入・返済) による手続きを行い、そのためには他者との共同体を結成しなくてはならない。しかし、本来フィリピンにおける双系制社会においては、自己中心志向の親族関係を基本とした個人対個人の相互扶助関係によって集団が形成されるため、他者との共同体の成立基盤が存在しない。そこで、儀礼親族関係を用いて他者を親族関係とすることで、より広い集団を成立させている。都市貧困地域における儀礼関係は、本来の強い紐帯関係は必要なく、HOA という他者との共同体に儀礼関係を組み入れることで、伝統的な枠組を保持するものである。

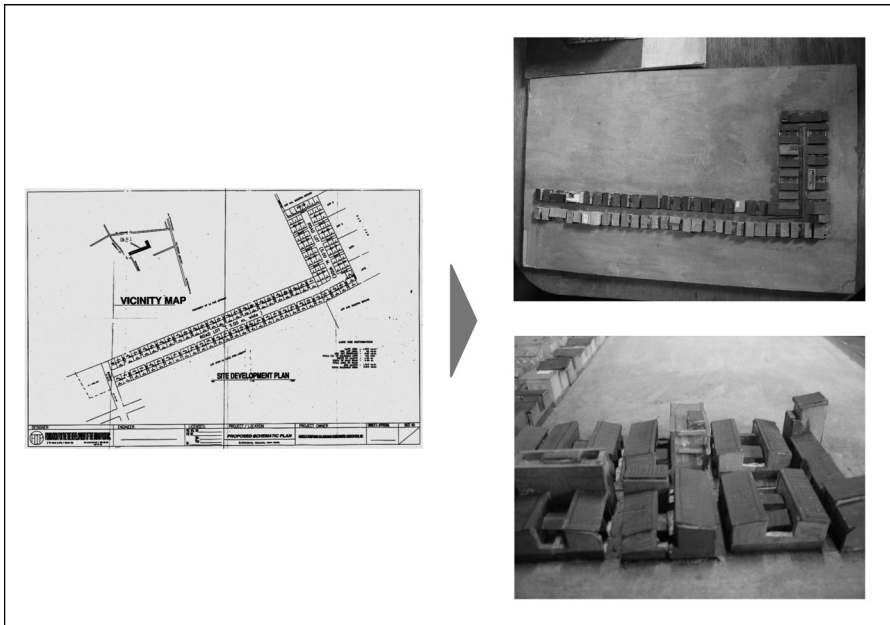
貧困地域において生き抜いていくためには、土地取得という近代的なシステムへの適応は必須のものである。一方で、他者との共同体設立を意識の上で許容するためには、儀礼親族関係などのフィリピンの価値観や社会構造を踏襲する必要がある。調査地域においては、儀礼親族関係の宗教的な意味合いが希薄になり、経済的組織において他者とのネットワークを形成する上で必要な儀礼親族という形式が残った。それは、儀礼親族関係の本質を形骸化して、伝統を経済的関係性の維持のために用いた戦略として捉えられる。

儀礼親族関係は、本来差異性を抱える他人をその差異性は保持したまま「儀礼の子供」とすることで、儀礼オヤと実の両親が共有できる存在に変容させる。しかし、都市貧困地域に見られる関係性は、フィリピンに典型的に見られる儀礼関係よりも、もっと緩やかで、曖昧な関係性であった。顔を合わせる場に見えてきたものは、かつて人類学者が記述したような共同性を強いる伝統的な関係性ではなく、他者性や違和性を包摂して緩いネットワークを持つ、新しい関係性である。重要な点は、多様な出身地を抱える住民がこの緩いネットワークを構築するために他者と共有するものを、頻繁かつ定期的に顔を合わせる場に見出していることであった。かつての住居研究で論じられてこなかった住民の動態的側面を「広義の建築」に関するフィールドワークによって捉える事ができる。

### 3-3-2 フェーズ2

CMP 事業に関わるコミュニティ全体計画のワークショップにおいては、住民と NGO の間で、図面、ドローイングや模型といった視覚的資料を使って議論が進められていた (図表 5)。このワークショップ活動で重要な点は、現実のコミュニティがこの模型に沿って構築されるということではなく、このコミュニティの全体イメージが視覚化されることによって、住民の住宅改善に対する意識が共有された点と、コミュニティ共有部分について住民が議論するための土台として利用された点にある。このプロジェクトでは、不法占拠していた既存の住居を新しく取得した土地へ移動させることが必要とされた。しかし、居住面積を縮小しなければならない住民の不満、移動と立替の順番、資金面の不足などの問題

図表 5 図面と模型



出所：NGO 資料，筆者撮影

から、実質的なコミュニティ改善が進行しない状況にあった。視覚的表現は、住民と NGO の協議が進行する契機をもたらした。

フェーズ 2 では、他者の使用した視覚的表現（ドローイングや模型）を共有すること、つまり他者の視点によるドローイングによって世界を眺めることが必要である。内部者の視点を取り入れた上で、そのドローイング自体を創造的に外側から解釈することが要求される。以上の点を踏まえて、筆者はイフガオ州からの移住者でメトロマニラの不法占拠地域に住む住民に対する調査において、筆者と住民がそれぞれ作成した模型とドローイングを用いて相互解釈を試みた。

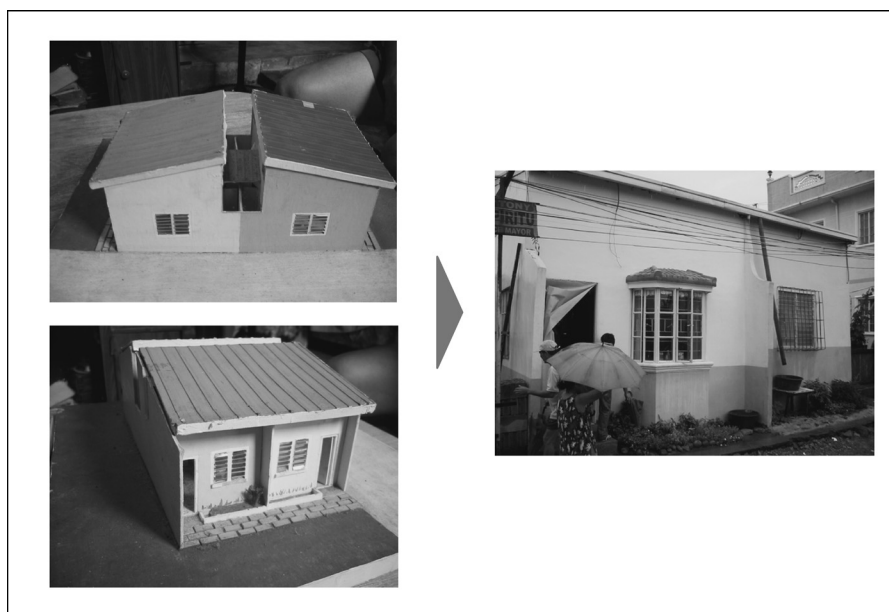
不法占拠地域において、シェルターから木造や木材とコンクリートブロックの混構造へ移行していく点については、都市住民に特徴的な住居概念が存在する。筆者はフィールドワークで当初、簡易的なシェルターから住居を更新していく場合、木造で建設するのが最適であると認識していた。フィリピンは木材が豊富な土地であるし、熱帯雨林気候に属しているため、気温は 1 年を通して高く、また移民の送り出し社会では木造や竹造の住居が一般的である場合が多い。実際、木材や竹などを利用した風通しがよい住居は、不法占拠地域のあらゆる場所で建設されていた。しかし、住民とドローイングを共有することによってわかった点は、木材で建設された住居よりも、コンクリートブロックで建設された住居の方が、住居としての価値が高いと認識する者が多いということであった。不法占拠地域の住民の中には、「木造でできているものは、住居ではない。」という意見もある。住民によると、住居には「重さ」が必要であるとのことであった。「重さ」とは、どっしりとした風格を持つ住居をイメージさせるものであり、都市の中に住まうときに安心感を与えてくれるものである。特に不法占拠地域では、住居に必須

の条件のひとつに安全性がある。住民の描く住居は一樣に外側に閉じた形をしており、伝統的な開放された住居イメージは存在していなかった。コミュニティにおいて治安問題に取り組む必要性は認識されているが、改善は容易ではない。住民は住民自身で安全性を確保する必要を感じており、安全性の高いコンクリートブロックによる住居を求めている。住居のスタイルは、場所、気候、広さ、コミュニティ、住民との関係性の中で成立しているものであり、調査地域の住民が望んでいる「重さ」のある住居は都市に住むということが前提にある。都市貧困地域の住居においては、住民が本来抱えている伝統的価値観や、社会構造がそのまま住居構造や隣地との関係に影響しているというよりも、都市という環境や地域の状況に適応した住民同士の関係が、その場限りのブリコラージュとして住居に映されていると認識すべきである。

### 3-3-3 フェーズ3

建築の構築という行為の特異性は、対象地域のいかなる価値体系の混乱や喪失にも関わらず、そのときの価値観や思想を解釈し、その場所に即した具体物を構築する点にある。図表6はフェーズ2の対象地域における住居模型と実際に建てられた住居である。この住居は、CMP事業によるHOAを結成後に、儀礼親族関係を結んで儀礼親族の関係となった住民同士が居住することを前提として住居が隣接している事例である。都市貧困地域における儀礼親族関係は等価な関係性であることから、狭小な土地を有効に使える手段として住民が導き出した住居プランである。この住居は、人類学者と住民の協働によって更新されることが期待されている。建築の構築というプロセスは、他者の生活に正面から関わり合い、コミュニティのために何ができるのか、どういった共有空間を構築するべきかなど、コミュニ

図表6 模型と住居



出所：NGO 資料，筆者撮影

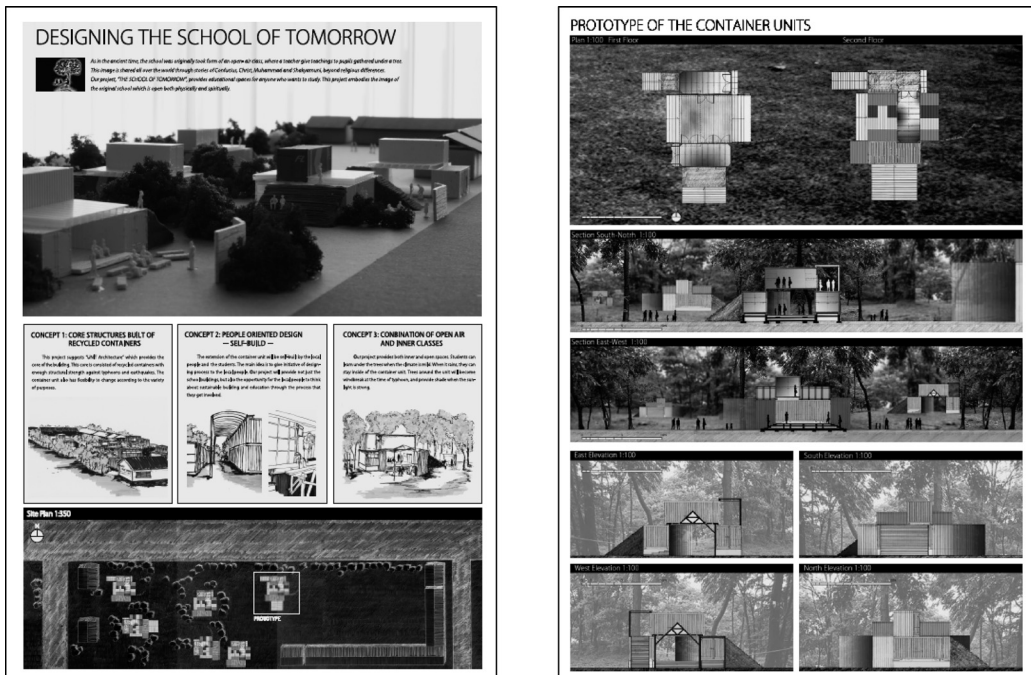
ティの将来の課題まで協議することへ繋がる。フェーズ3の建築の構築は人類学者と他者の両者が主体であり、その意味において画一的な手法は存在し得ない。子供の成長、住民の入替や親族関係の変化など様々な生活変容によって、最適解が常に変化していく。人類学者と他者はそれらの変化を察知し、フェーズ3からフェーズ1に再帰することになる。

### 3-4 提案者としての人類学者

筆者は、より積極的な提案者として他者との建築的実践の可能性を追求する試みとして、フィリピンにおける国際建築設計競技「Millennium School Design Competition」へ参画した。このコンペが目指すものは現在多くの国が直面している人口増加、気候変動、貧困などの問題解決に向けた建築による新しいチャレンジであり、材料、デザイン、工法などを包括した革新的な提案を基に、これらの諸問題を直視するものであった。特にフィリピンは台風や地震など自然災害も多く毎年大きな被害が発生する地域である。そのため、コンペではこれらの自然条件に対する対策を施し、フィリピンに限らず他の国でも対応可能なプロトタイプを要求していた。

筆者の応募案(図表7)においては、フィリピンにおけるフィールドワークと住民との協働を踏まえ、地域独自の技術を利用した住民志向型の建築プロセスのあり方を提案した。また、フィールドワークの結果から得られた都市貧困地域の人間関係及び空間認識を踏まえた上で、都市貧困地域の開発において

図表7 模型と住居



出所：国際建築設計競技“Millennium School Design Competition”応募案

受賞：フィリピン建築家協会主催国際建築設計競技“Millennium School Design Competition”入選、2008年4月、フィリピン国防省フィリピン国家災害調整局市民災害課主催“Be Better, Build Better Program”フィリピン大統領式典：フィリピン国防大臣賞受賞、2008年8月

はどのような場の構築が可能なのかについて提案した。建築は3つのコンセプトに基づいて構成した。1点目は構造体をリサイクル素材とする点、2点目は構造体以外の部分は地元の建築技術を活用し住民のセルフビルドで構築する点、3点目はフィリピンの気候や生活環境にあった空間として、外部と内部を繋いだ空間を取り入れた点である。この3点に基づいてフィリピンという地域に適合した住民中心志向の学校建築プロセスを提案し、入賞を果たしている。しかしながら、本案は未だ実現まで至っておらず、フェーズ2の広義の建築として住民に提示されたに留まる。

## おわりに

本稿では、人類学という既存の枠組を乗り越える試みとして建築人類学を提案した。建築人類学という提案が抱える領域はあまりに広く、本稿の中で触れられていない又は十分な議論がされていない課題が山積していることは、筆者は十分に認識している。しかし、文化人類学という学問領域の現状を鑑みると、筆者は今後どのようなアプローチでこの学問領域に切り込んでいくのか自己規定する必要がある。人類学という名称が今後残るか問うことには意味がない。少なくとも、フィールドワークという手法によって異文化を理解するという試みが今後も続けられるならば、その成果を他者とどのように共有できるのか考え、また社会に還元する実践的な方策を探索することが目下の課題といえる。建築人類学は、ある特定の人々だけが所有する共有財産としての文化を理解するのではなく、むしろ開かれたコモンズとしての文化を創り出している場に参画していくイメージである。このプロセスによって、アカデミズムという制度内の知とその制度外の知を協働させ、アカデミズムという制度に変わる新しい知を生成する場と新しい文化概念の創造が可能となると信じている。

## 謝辞

本稿の核心である「人類学と建築学の領域を横断した異文化理解に関するアプローチ」というアイデアは、2003年にペルー ESAN 経営大学院大学で客員教授であった菊地靖教授をご訪問したときに、南米地域における人類学と建築学の位置づけをご教示頂いたことが契機です。7年という歳月が流れながら遅々として進まなかった研究成果を試論の段階ではありますが、アジア太平洋討究菊地靖教授退職記念号に投稿することが出来ました。心より、感謝申し上げます。

## 追記

本稿は、2008年度小野梓記念賞（学術賞）受賞論文に新たな知見を加えて加筆修正し、簡潔にまとめ直したものである。また、2009年度科学研究費補助金（若手研究(B) 研究課題番号：20720242「都市貧困地域における共同性の意識と「共通の枠組み」に関する人類学的研究」）の研究成果の一部である。



## 参考文献

### 英語文献

- Bakhtin, M. M. (1981) *The Dialogic Imagination*, University of Texas Press.
- Bamyeh, A. M. (1993) Trend Report: Transnationalism, *Current Sociology* 41-3, pp. 1-101.
- Boulding, Kenneth (1956) *The Image: Knowledge in Life and Society*, Ann Arbor, University of Michigan Press.
- Carsten, J. & Hugh-Jones, S. (eds.) (1995) *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clifford, J. & Marcus, G. E. (eds.) (1986) *Writing Culture: Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press.
- Clifford, J. (1997) *Routes: Travels and Transitions in the Late 20th Century*, Harvard University Press.
- Clifford, J. (2004) Looking Several Ways: Anthropology and Native Heritage in Alaska, *Current Anthropology* 45(1): pp. 5-23.
- Cunningham, C. E. (1973) Order in the Atoni House, *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, R. Needham (eds.), University of Chicago Press, pp. 204-238. [1964 *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 120: pp. 34-68]
- De Soto, Hernando (2000) *The Mystery of Capital — Why Capitalism Triumphs in the West and Fails Everywhere Else—*, Basic Books.
- Dühr, Stefanie (2007) *The Visual Language of Spatial Planning: Exploring Cartographic Representations for Spatial Planning in Europe*, Routledge.
- Ellen, R. (1986) Microcosm, Macrocosm and the Nuauulu House: Concerning the Reductionist Fallacy as Applied to Metaphorical Levels, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 142(1), pp. 1-30.
- Forester, John (1993) *Critical Theory, Public Policy, and Planning Practice*, State University of New York Press.
- Fox, J. J. (1987) The House as a Type of Social Organization on the Island of Roti, *De la hutte au palais: sociétés «à maison» en Asie du Sud-Est insulaire*, C. Macdonald (eds.), Paris, Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 171-178.
- Glick Schiller, N. & Basch, L. & Blanc-Szanton, C. (1992) Transnationalism: A New Analytical Framework for Understanding Migration, N. Glick Schiller, & L. Basch & C. Blanc-Szanton (eds.), *Towards a Transnational Perspectives on Migration: Race, Class, and Nationalism Reconsidered (Annual of the New York Academy of Sciences vol. 645)*, New York Academy Sciences, pp. 1-24.
- Healey, Patsy (1997) *Collaborative Planning: Shaping Places in Fragmented Societies*, University of British Columbia Press.
- Innes, E. Judith (1998) Information in communicative planning, *Journal of the American Planning Association* 64(1), American Planning Association.
- Lévi-Strauss, C. (1982) The Social Organization of the Kwakiutl, *The Way of the Masks*, Seattle S. Modelski (trans.), University of Washington Press, pp. 163-187.
- Needham, R. (eds.) (1973) *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, University of Chicago Press.
- Neuman, Michael (1996) Images as institution builders, *European Planning Studies* 4(3), pp. 293-312.
- NHA (2000) *Magnitude of Informal Settlers in Metro Manila Summary*, National Housing Authority.
- NHA (2002) *Families Relocated/Resettled: August 1982-December 2001*, National Housing Authority.
- Portes, A. & Guarnizo, L. E. & Landolt, P. S. (1999) The Study of transnationalism: pitfalls and promise of an emergent research field, *Ethnic and Racial Studies* 22, pp. 217-237.
- Robbins, Edward (1994) *Why Architects Draw*, MIT Press.
- Rosaldo, R. (1989) *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*, Beacon Press.
- Said, E. W. (1978) *Orientalism*, Georges Borchardt Inc.
- Sangren, P. S. (1988) Rhetoric and the Authority of Ethnography: "Postmodernism" and the Social Reproduction of Texts, *Current Anthropology* 29, pp. 405-435.
- Southall, A. (1973) *Urban Anthropology : Cross-Cultural Studies of Urbanization*, Oxford University Press.
- Vertovec, S. (1999) Conceiving and Researching Transnationalism, *Ethnic and Racial Studies* 22(2), pp. 447-461.

### 和文献

- 浅川滋男 (1994) 『住まいの民族建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』, 建築資料研究社.
- 上杉富之 (2004) 「人類学から見たトランスナショナリズム研究: 研究の成立と展開及び転換」, 『日本常民文化紀要』

24, 成城大学大学院文学研究科.

菊地靖 (1980) 『フィリピン社会人類学』, 敬文堂.

佐藤浩司 (1989a) 「民族建築学／人類学的建築学 (上)」, 『建築史学』 12, pp. 106-132.

佐藤浩司 (1989b) 「民族建築学／人類学的建築学 (下)」, 『建築史学』 13, pp. 93-115.

外尾一則・岩田鎮夫 (1993) 「マニラ大都市圏の民間都市開発の特質」, 『1993 年度第 28 回日本都市計画学会研究論文集』, 日本都市計画学会, pp. 787-792.

山口昌男 (1983) 「家屋を読むーリオ族 (インドネシア・フローレス島) の社会構造と宇宙観ー」, 『社会人類学年報』 9, pp. 1-28.

若桑みどり (2000) 『イメージの歴史』, 放送大学教育振興会.

# 翻訳文献

ヴィルヘルム・シュミット & W・コッパース (1970) 『民族と文化』, 大野俊一 (訳), 河出書房新社.

エドワード・W・サイード (1993) 『オリエンタリズム 上・下』, 板垣雄三・杉田英明 (監修)・今沢紀子 (訳), 平凡社.

ジェイムズ・クリフォード & ジョージ・マーカス (編) (1996) 『文化を書く』, 春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子 (訳), 紀伊国屋書店.

ジェイムズ・クリフォード (2002) 『ルーツ: 20 世紀後期の旅と翻訳』, 毛利嘉孝・有本健・柴山麻妃・島村奈生子・福住廉・遠藤水城 (訳), 月曜社.

ダン・スベルベル (1979) 『象徴表現とはなにか』, 菅野盾樹 (訳), 紀伊国屋書店.

デヴィッド・ハーヴェイ (1999) 『ポストモダンシティの条件 (社会学の思想 3)』, 吉原直樹 (訳), 青木書店.

ベネディクト・アンダーソン (1987) 『想像の共同体ーナショナリズムの起源と流行』, 白石さや・白石隆 (訳), リブレポート.

レナート・ロサルド (1998) 『文化と真実』, 椎名美智 (訳), 日本エディタースクール出版部.

ロドニー・ニーダム (1977) 『構造と感情』, 三上暁子 (訳), 弘文堂.

ロドニー・ニーダム (1993) 『象徴的分類』, 吉田・白川 (訳), みすず書房.

J・P・E・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング (1987) 『オランダ構造人類学』, 宮崎恒二他 (訳), せりか書房.

# 注

- 1 Clifford, J. & Marcus, G. E. (eds.) (1986) *Writing Culture: Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, p. 3.
- 2 Rosaldo, R. (1989) *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*, Beacon Press, p. 38.
- 3 前掲, Clifford & Marcus (1986), Rosaldo (1989).
- 4 Sangren, P. S. (1988) Rhethoric and the Authority of Ethnography: "Postmodernism" and the Social Reproduction of Texts, *Current Anthropology* 29, pp. 405-435.
- 5 レナート・ロサルド (1998) 『文化と真実』, 椎名美智 (訳), 日本エディタースクール出版部, p. 249-290.
- 6 Clifford, J. (1997) *Routes: Travels and Transitions in the Late 20th Century*, Harvard University Press.
- 7 佐藤浩司 (1989) 「民族建築学／人類学的建築学 (下)」, 『建築史学』 13, pp. 93-115.
- 8 J・P・E・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング (1987) 『オランダ構造人類学』, 宮崎恒二他 (訳), せりか書房.
- 9 前掲, デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング (1987) p. 53.
- 10 Cunningham, C. E. (1973) Order in the Atoni House, *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, R. Needham (eds.), University of Chicago Press, pp. 204-238. [1964 *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 120: pp. 34-68]
- 11 前掲, 佐藤 (1989), pp. 93-94, ダン・スベルベル (1979) 『象徴表現とはなにか』, 菅野盾樹 (訳), 紀伊国屋書店.
- 12 前掲, 佐藤 (1989), p. 97.
- 13 Ellen, R. (1986) Microcosm, Macrocosm and the Nuauulu House: Concerning the Reductionist Fallacy as Applied to Metaphorical Levels, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 142(1), Leiden, p. 4.
- 14 中谷礼仁 (2004) *建築と築建*, 近世建築論集, 編集出版組織体アセテート.
- 15 ユルゲン・ハバースマス (1985) 『コミュニケーション的行為の理論 上』, 河上倫逸 (訳), 未来社.
- 16 Forester, John (1989) *Planning in the Face of Power*, University of California Press., Forester, John (1993) *Critical Theory, Public Policy, and Planning Practice*, State University of New York Press.
- 17 Healey, Patsy (1997) *Collaborative Planning: Shaping Places in Fragmented Societies*, University of British Columbia Press.

- 18 Innes, E. Judith (1998) Information in communicative planning, *Journal of the American Planning Association* 64(1), American Planning Association.
- 19 Bakhtin, M. M. (1981) *The Dialogic Imagination*, University of Texas Press.
- 20 Robbins, Edward (1994) *Why Architects Draw*, MIT Press, p. 37.
- 21 Dühr, Stefanie (2007) *The Visual Language of Spatial Planning: Exploring Cartographic Representations for Spatial Planning in Europe*, Routledge.
- 22 笠真希 (2007) オランダの都市デザイン協議プロセスと「空間による枠組み」に関する研究, 早稲田大学博士論文.
- 23 Needham, Barrie (1997) A Plan with a Purpose: the Regional Plan for the Province of Friesland 1994, *Making Strategic Spatial Plans: Innovation in Europe*, P. Healey & A. Khakee & A. Motte & B. Needham (eds), pp. 173–190.
- 24 Neuman, Michael (1996) Images as institution builders, *European Planning Studies* 4(3), pp. 293–312.
- 25 前掲, Robbins (1994) p. 5.
- 26 前掲, Robbins (1994) p. 5.
- 27 前掲, Robbins (1994) p. 4.
- 28 菊地靖 (1980) フィリピンの社会人類学, 敬文堂. p. 48.
- 29 川上洋司・名倉重晴・根本敏則 (1999) フィリピンにおける都市の整備と都市計画, アジアの都市計画, (社)日本都市計画学会九州支部 (編), 九州大学出版会, pp. 91–119. 外尾一則・岩田鎮夫 (1993) マニラ大都市圏の民間都市開発の特質, 1993 年度第 28 回日本都市計画学会研究論文集, 日本都市計画学会, pp. 787–792.
- 30 中西徹 (1991) スラムの経済学, 東京大学出版会, pp. 51–53.
- 31 NHA (2002) *Families Relocated/ Resettled: August 1982–December 2001*, National Housing Authority.
- 32 De Soto, Hernando (2002) *The Mystery of Capital*, Bantam Press.